

Louÿs, Pierre et Barbier, G.

Les chansons de Bilitis; traduit du grec.

Paris, P. Corrad, 1922. (文献番号9-168)

ルイ著 バルビエ画

ビリティスの唄

詩篇『ビリティスの唄』はその序文において、およそ24世紀もの昔に葬られた一人の遊び女ビリティスの墓の内壁に、彼女自身によってギリシャ語で記されていたもので、G. ハイムなる人物によって近年発見されたと紹介されている。しかし、実際にはそれは1894年に、詩人P. ルイ (1870—1925) がアラビア系の美貌の娼婦をモデルに創作、発表したものである。したがってビリティスは実在ではなく、詩人が生み出した架空の女性であり、発表当時はそのいかにも女性の手によるかのごとき表現や、もっともらしい序文の語り口、第4章として構成された同作品の書誌などのために、彼の虚構を真実と受け取る人も少なくなかったと言われる。

序文に続く詩篇は3章からなり、パンフィリー (現在のトルコの南西部の地中海側に位置する)、レスボス島、キプロス島を舞台に、ビリティスの思春期の恋の目覚めから、成熟期を経て死にいたるまでの同性愛と異性愛の遍歴が物語られているが、とりわけその前者における繊細で甘美な情感が、彼女の生身の身体まで彷彿とさせるかのごとき心の内側の密やかな動きまで表した詩文によって、牧歌的に、あるいは官能的に、そして叙情豊かに唄われている。またそこに感じ取れる異教世界や古代の描写は、新鮮なエキゾティシズムと夢幻のようなエロティシズムを漂わせている。発表以来その人気は高く、根強かったが、我が国でもすでに数種類の抄訳、及び美しい挿画入り完訳書が出版されている。

さて標題の書は、この詩篇に木版とポショワールによる13枚のプレートと30点の挿画をそえて、すべてジャポン紙に刷ったカイエ形式の、本というよりは、美術品のような書物である。プレートと挿画の原画はジョルジュ・バルビエ、版刻はF. L. シュミッド (Schmied, F.L.), 刷りはピエール・ブーシェ (Bouchet, Pierre) による。また麻布を貼った帙にはグログランのリボンの葉が添えられ、それには直径 4.6cm のメダルが付いている。その彫金の作者はアルベール・ポンミエール (Pommier, Albert) と記されている。125部の限定出版であり、本学図書館所蔵のものはその110番に当る。

